戦国時代末期の城郭からみた権力構造

―下総・原氏を中心として―

柴　田　龍　司

目　　次

1．はじめに……431

2．城郭の概要……434
(1)　臼井城跡……434
(2)　本佐倉城跡……438
(3)　生実城跡……443

3．各城跡の検討……446

4．おわりに……448

1．はじめに

近年の城郭研究、特に中世城郭に関しては目覚しい進展がみられるといってよいであろう。現在でも依然として見受けられるが、近世に書かれた軍記物をベースとした合戦記から脱却した研究が主流となっている。そして、この研究には①考古学、②縄張、③中世史料と地名、と大きく3通りの方法に分類することが出来るであろう。

①は1970年代以降急速に進展してきた分野であり、奈良国立文化財研究所で集成[(1)]した調査報告書が858冊[(註1)]にも上ることからも理解されるであろう。千葉県内でも1982年度14ケ所[(2)]、83年度13ケ所[(3)]の城跡の発掘調査が実施されている。現在城跡について記述された印刷物の中では考古学関係のものが最も多く刊行されていると思われ、城跡研究で無視することの出来ない研究方法である。しかし、他の時代の発掘についてもいえることであるが、発掘調査は広範囲な城跡の中の極く一部を対象とする事例がほとんどであり、また検出遺構、遺物の僅少さもあり、調査件数の割にはその成果を活用出来ない面が多い。それでも、遺構・遺物から縄張の変遷や性格を解明するといった考古学手法のみが有する具体的な実証は今後の城郭研究にとっても主流であろう。

②は測量図・概念図・絵図を使って城跡の縄張を明らかにする方法であるが、個々の城跡のみならず、他の城跡の縄張と比較することによって共通点・相違点を見出し、地域的なレベルで研究することが可能となる。この研究方法は測量図を必要とすることから考古学研究とも重なる面がある。この研究方法の最も問題となる点は、現状で認められる遺構を元にしか研究出来ないことである。現在我々の見ることの出来る城跡は後の改変を考慮しなければ廃城時の縄張であり、それ以前の縄張は発掘調査以外では確認出来ない。また全国に何万ケ所とある中世城跡の大部分は16世紀代に使用されていたであろうから、時代的にも限定されたものにならざるをえない。しかし、正確な測量図や概念図による縄張研究は最近盛んになったばかりで[(註2)]、いまのところ軍事的な視点が多いようであるが、広い地域での比較検討が可能なこの方法は、戦国大名や国人領主単位での社会構造まで言及出来るものである。

③は近年の傾向として、戦国時代の城下町研究の進展が上げられるであろう。特に関東地方の戦国期城下町を扱ったものが多く、松岡進氏[(4)]や市村高男氏の一連の論稿[(5)]など[(6)]があり、後北条氏や結城氏などの戦国大名の城下町を取り上げている。中世文書や城絵図、さらに残された地名を資料に戦国期城下町の性格や大名権力との関係を鋭く論稿している。現段階において、城郭を視点にした研究の中で最も意義のあるものと思われる。しかしこの研究方法にも問題がないわけではなく、必然的に後北条氏といった中世文書が多く残された大名を対象とせざるをえない。例えば千葉県を形成する房総三国に関連する文書は非常に少なく、領主層の支配構造を

明らかにすることが困難な状況である。さらに戦国期城下町について文書を主な資料として明らかにすることは到底無理であろう。

以上のごとく3通りの城郭研究の現状と問題点について簡単に触れてみたが、その中で今後も益々増加するであろう考古学による城郭研究についてもう一度述べてみたい。

発掘という考古学手法は、よくいわれるように一回限りの調査であり、現状では発掘イコール破壊となっている。表面観察による縄張研究や中世史料を使った城郭研究と決定的に違う点は、大部分の発掘調査は終了後破壊され、後に一冊の報告書が残るだけであり、それだけ責任の重い研究方法である。また先述したように城域内の限定された地区の調査となる例が多いことから、地域的にも個々にも城郭の中での位置付けといった視点が弱く、中世史研究において基本資料となっていないのが現状であろう。現在の城郭発掘調査においては、そこから出土した陶磁器の編年と、それから導き出された中世の流通問題解明といった視点に関心が集中する傾向がある。

ところで、本論は中世城跡を基本資料として、そこから得られた発掘調査の成果と縄張から、従来文献からいわれている領主層の権力構造について実証するのを目的としている。ここで取り上げた領主層は戦国時代末期(註3)に下総の実質的な盟主であった原氏である。

原氏は15世紀中頃には千葉宗家の重臣となっており、小弓城（千葉市）や小西城（大網白里町）を拠点とし、下総南部を勢力基盤としていたが、千葉宗家の衰退に替て徐々に勢力を拡げ16世紀後半以降には千葉宗家を凌ぐ勢力を持つに至った領主層である。原氏に関する文書は房総の領主層の中で多い部類ではあるが、他地域と比べれば格段に少なく、かつ権力構造を知るようなものはほとんどないといえるであろう。千葉氏関係の文書を含めて上記の千葉氏と原氏の関係がおぼろげながらわかる程度である。

このような原氏と千葉氏の関係について、中世城跡を通してみてみようとするわけであるが、基本資料となる中世城跡は、原氏の居城であった臼井(うすい)城跡と生実(おゆみ)城跡、及び千葉氏の居城であった本佐倉(もとさくら)城跡の三城である。以下次章で各城跡の歴史や縄張の概要について説明していきたい。

1章　註

註1　858冊の文献の中には，古代城柵・近世城郭・チャシ・グスクも含まれているが，大部分は中世城郭である。

註2　戦前から縄張研究は行なわれていたが，模式図的な概念図が主流であり，現在の縄張研究とは一線を画さざるをえない。また正確な概念図とは，郭の大きさ・堀の幅といった規模の上での正確さとは違い，城の機能を理解した上で表現された図を意味する。測量図より縄張を把握するのに有用な概念図は近年多く公にされている。

第1図　本稿に関連する城郭位置図(国土地理院「東京」「千葉」1：200,000使用)

註3　ここでは戦国時代の終りを後北条氏が滅亡した天正18年（1590）におき，戦国時代末期とは天正年間を示す。

2．城郭の概要

(1) 臼井城跡

位　置　佐倉市の北西部に位置し主要部は臼井田、新臼井田にある。京成成田線臼井駅から北に約1kmのところである。

城跡は、四街道市に源を発し北流して印旛沼に注ぐ手操川と、千葉市土気地区に源を発しやはり北流して印旛沼に注ぐ鹿島川の両河川に挟まれた下総台地の北西端臼井台地に占地している。

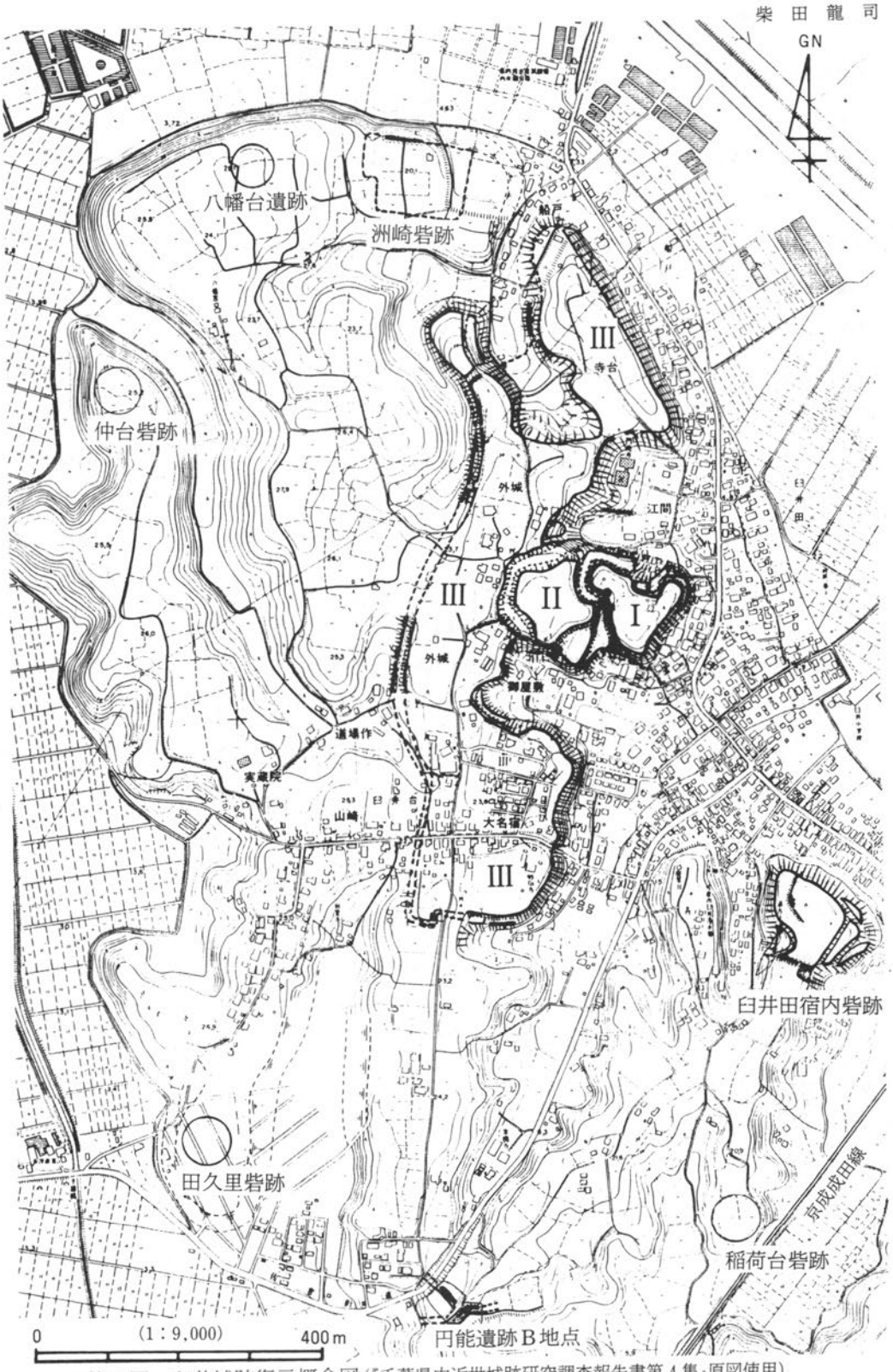
臼井台地は、北から北東にかけて印旛沼に面し、西は手操川が形成する低地に面する。南は樹枝状支谷によって狭められてはいるが、台地基部へと続いている（現在は宅地開発で地形は激変している）。また臼井台地自体も小規模な樹枝状支谷が多く入り込み、台地中央部を基点に舌状台地を八ツ手状に配した地形となっている。

歴　史　鎌倉時代には千葉氏一族と考えられる臼井氏の名が『吾妻鏡』にみられ、臼井城跡のあたりを本拠地としていたらしい。14世紀中頃になると、臼井興胤が一時失なっていた臼井の本領に復帰し臼井城に居城としたという。ただ、このことに関しては正徳5年（1715）に書かれた『総葉概録』が出典のためどこまで史実を反映しているのかは疑問である。

確実な史料の現われるのは15世紀後半になってからで、室町時代末期に成立した『鎌倉大草紙』[(7)]や『本土寺過去帳』[(8)]によれば、千葉宗家をめぐる抗争から、旧宗家の系統である武蔵千葉氏と扇谷上杉氏の家宰太田道灌の弟太田図書助資忠の軍勢によって文明11年（1479）攻撃され落城した。落城後は武蔵千葉氏が領有し城代を置いたとされる。以後16世紀中頃まで臼井城は史料的には全くの空白期となるが、武蔵千葉氏はまもなく衰退したこともあって臼井氏が臼井城に復帰したものと思われる。

16世紀中頃になると、生実城（千葉市）を本城とした千葉氏の重臣である原氏が、下総で勢力を拡大し千葉宗家の衰退に乗じて下総の実質的な盟主になりつつあった。後の情況からみてこの頃原氏は臼井氏に替って臼井城主となったと思われる。永禄4年（1561）には里見義堯とその重臣正木大膳によって臼井・生実両城は落城したが、永禄7年（1564）の第二次国府台合戦によって里見氏が敗北したため、まもなく原氏は両城に復帰したと『総葉概録』に記されている。永禄9年（1566）には上杉謙信の軍勢によって臼井城攻めが行なわれた。この城攻めは「……臼井之地実城堀一重……」[(9)]と文書に書かれたように落城寸前までいったが、辛うじて落

柴田龍司



第2図　臼井城跡復元概念図(『千葉県中近世城跡研究調査報告書第4集』原図使用)

城は免れられている。以後永禄13年（1570）から元亀年間（1570～72）にかけて正木氏の下総侵入がたびたび行なわれたが情勢を変化させるまでには至らなかった。

しかし、天正18年（1590）豊臣秀吉によって後北条氏が滅亡すると共に、後北条氏側であった千葉氏や原氏も運命を共にすることとなった。原氏滅亡後の臼井城には徳川家康の家臣で酒井家次が3万石で入城し、慶長9年（1604）酒井氏の高崎転封と共に廃城となった。

城跡の概要　広義の臼井城跡と狭義の臼井城跡とに分けることが出来る。まず狭義の臼井城跡からみていくと、大きくⅠ～Ⅲの郭に区分される（第2図）。

Ⅰ・Ⅱ郭は西から東へ突出した舌状台地にあり、Ⅲ郭は臼井台地の東側3分一を占め、Ⅰ・Ⅱ郭を囲むように拡がっている。Ⅰ郭は近世の城郭では本丸に相当する郭で、上幅19m～30m、深さ4m～6mの空堀によって区画され、わずかに土橋のみによってⅡ郭と連絡出来る。またⅡ郭に面する西側のみに土塁が認められる。Ⅰ郭は1985年2月～3月と同年11月～12月の二度にわたって臼井城跡研究会（会長・岡田茂弘国立歴史民俗博物館教授）により発掘調査が実施された。調査成果によれば、[10] 第1次調査は南半部を対象とし、15世紀後半の常滑焼や罹災した壁土を出す方形土坑や金箔片・永楽通宝銭を納めた地鎮土坑が検出されると共に、土塁に新旧2時期の変遷があったという。また近世初頭の盛土面と礎石も確認された。第2次調査は北西部を対象とし、土塁内に埋められた古い虎口や16世紀後半～末の陶磁器を出土する火災面や火災面上に厚さ約30cmの盛土、火災面下に厚さ約50cmの盛土面等が検出されている。本報告がまだ刊行されていないので、断定は出来ないが、発掘時の見学による所見も含めて考えれば、Ⅰ郭は16世紀後半に大規模な造成を受けたといってよいであろう。

Ⅱ郭は上幅28m～45m、深さ6m～16mの大規模な空堀によって台地本体から切離されている。空堀に面して近年まで土塁が存在していた。1983年㈶千葉県文化財センターにより、Ⅰ・Ⅱ郭とⅢ郭の一部の測量調査と共にⅡ郭の発掘調査が実施された。[11] 発掘調査は小面積の確認調査であったが予想を上回る成果が上げられた。まず、Ⅱ郭の北半から西半は厚いところで1m以上の版築手法による盛土造成が施されていた。盛土層中及び下部から出土した中国磁器や美濃産の灰釉陶器の編年から盛土造成は16世紀後半の所産と思われる。そして盛土造成面下には土坑墓が多数検出されたことから、Ⅱ郭は大規模な造成を受ける前はかなりの部分が墓域として使用されていた可能性がある。またⅡ郭の南寄りで土塁の基定部と思われる版築手法による盛土が確認され、現状での段差を考えるとⅡ郭は本来細分されていたようだ。

Ⅰ・Ⅱ郭が上杉謙信の臼井城攻めについて書かれた文書に出てくる「実城」に当たるものであろう。

Ⅲ郭は上幅7m～15mの空堀によって区画された東西約250m、南北約1,000m[註1]の細長い郭である。現状は4ヶ所にわたってみられ、連続してはいないが、確認調査で埋没した空堀を検出

していることから、本来は連続していたことは確実である。この空堀はⅠ・Ⅱ郭の空堀と比べると小規模ではあるが、「出桝形」と呼ばれる張り出しや二重土塁が認められ、防禦的に強化されている。またこれらの遺構の形態から16世紀後半の所産であると思われる。

以上Ⅰ～Ⅲ郭までが狭義の臼井城跡であり、また従来からいわれている臼井城跡の城域である。

次に広義の臼井城跡についてみてみると、臼井台地端の要所要所には5ヶ所の砦跡(註2)があり、また大手口と考えられる土塁と空堀や中世の墓城が発掘調査によって検出されている。ただ現在これらの砦跡や遺跡は宅地開発によって大部分破壊され、僅に砦跡が一ヶ所残っているに過ぎない。以下これらの砦跡や遺跡についてみてみることとしたい。(11)

洲崎砦跡は現在北辺にのみ土塁の一部が残っているだけであるが、地籍図から復元してみると、東西約150m、南北約100mの規模を有し、北辺を除く三辺は空堀が巡らされていた。当然土塁が伴っていたであろう。また西辺には折歪が認められる。残存土塁からみて土塁の下幅は10m以上あると思われる。「臼井郷図」(註3)には「家ノ子部屋城」と記載されている。土塁の規模や空堀に折歪があることから16世紀後半の形態であったことは確かであろう。

八幡台遺跡は1972年～73年にかけて発掘調査が実施され、重複した20～30基の中世墓坑群や、墓域を画する上幅1m程の溝が検出されている。溝内より板碑片や五輪塔の一部が出土しているという。

仲台砦跡は八幡台遺跡発掘調査の折、極く小面積の調査が実施されただけで、何条かの溝が検出されたのみである。しかし調査以前の現状では、台地西縁に沿って高さ1m程の土塁状高まりが不連続にあり、斜面には腰曲輪が認められている。規模は東西150m、南北100m程と想定される。また「臼井郷図」では台地を横断する土塁を伴う空堀や砦内の妙見社が描かれている。そして洲崎砦同様「家ノ子部屋城」の記載がある。

田久里砦跡は破壊される以前には舌状台地先端部近くに占地し、北・東・南の各辺に土塁が巡り、西辺には腰曲輪があり、虎口は東側にあったという。地籍図で復元してみると、東西約70m、南北約110mの規模となる。

円能遺跡B地点は「臼井郷図」で「大手」と記されたあたりで、1974年区画整理事業に伴い発掘調査が実施された。発掘で調査以前に残存していた土塁に伴う上幅7.9m、下幅0.9mの折歪を持つ空堀が検出されている。規模からみて16世紀以降の所産であろう。

稲荷台砦跡も区画整理事業に伴い1974年発掘調査が実施され、東・南の各辺に土塁とその外側に上幅5m～8mの空堀が検出され、空堀は折歪を持っている。規模は南北は不明で東西70m程となる。

臼井田宿内砦跡は唯一ほぼ現形が保たれている。舌状台地先端部に占地し、台地を横断する

土塁と空堀によって区画される、北・東・西の斜面部には腰曲輪が認められ、郭内には1m程の段差があることから細分される可能性もある。東西160m、南北110m程の規模となる。

砦跡5ヶ所、大手口と思われる遺跡、中世墓域とみてきたが、このうち墓域については臼井台地の他地点で15世紀の板碑が何点か発見されていることから、16世紀代の臼井城と直ちに結びつけることは出来ない。だが、砦跡や円能遺跡B地点のような空堀や土塁を有する城郭遺構が、Ⅰ～Ⅲ郭からなる臼井城が機能していた時期すでに利用されていなかったと考えるには無理があり、あくまでも同時期に存在していたとみて間違いあるまい。5ヶ所の砦跡が、全て舌状台地先端部に占地し、基本的には単郭であり、規模的にも似かよっている点は同時期の築城を考えさせるものである。もしそうであるなら、これらの砦跡は在地領主層の居館から派生したものではなく、円能遺跡B地点を大手口としてそれ以北の台地全域を城郭化する過程で築城されたものであろう。その時期は、原氏の勢力拡大期やⅡ郭の盛土造成から16世紀後半、そして永禄13年（1570）千葉胤富から原大炊助に出された判物にみえる「（略）一山之事、稲荷台者、元来神木之上、公私不可成其綺者他（略）」[(12)]を稲荷山砦の地を指しているとすれば、築城は永禄13年以降となるであろう。

広義の臼井城については、要所要所に砦を築き南北約1,650m、東西約1,100mの非常に広範囲な城域を成している。現在のところ生活遺跡は検出されてはいないが、広範囲な城域から考えれば当然存在していたと思われる。ただ、それが城下町といえるような集住したものかどうかは臼井城だけからは今のところ言及出来ない。集住、分散いずれにせよ城域内には城下町的な集落が伴っていたであろう。

2章1節　註

註1　文献11ではⅢ郭空堀の南辺が不明確なため，想定ラインを南北800mとしたが，報告書刊行後想定ラインの南側に空堀を確認したので南北の規模を変更した。

註2　規模や形態から，城・館・砦と厳密に区分することは不可能であり，全て城の概念で捉えているが，○○砦址と固有名詞化しているため，今回はそれにならっている。

註3　臼井地区の山崎昭介氏宅に伝えられている古城図で，近世に作製されたものである。

(2)　本佐倉城跡

位　置　印旛郡酒々井町の西端佐倉市との境に位置する。主要部は本佐倉字城ノ内、根古屋に、外郭部は本佐倉字北大堀から上本佐倉字上宿にかけて展開している。京成成田線大佐倉駅から南東に約500mのところにある。臼井城跡は西方約7kmの位置にある。

城跡は、富里町・八街町に源を発し西流して印旛沼に注ぐ高崎川と印旛沼低地に狭まれた台地上に占地している。この地点は高崎川と印旛沼低地が最も近接するところで、ここから台地

は現在の佐倉市街地が乗る台地と、印旛沼に突き出す北西に延びる台地とに分かれる。城跡が展開する台地も、下総台地特有の小規模な樹枝状支谷が多く入り込み、至るところで舌状台地を成している。

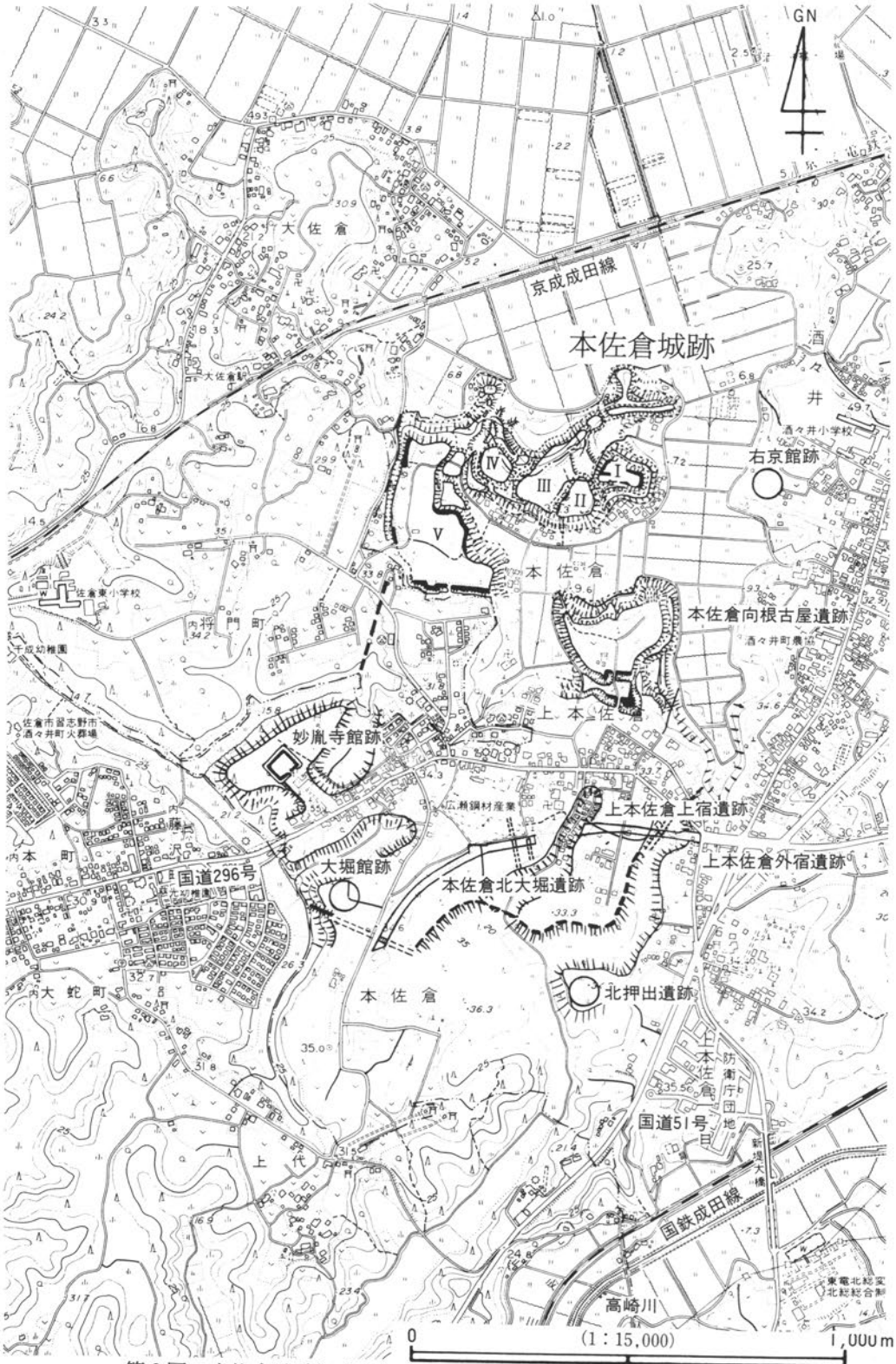
歴　史　康正元年（1455）千葉氏一族の馬加康胤によって宗家が亡ぼされ、以後馬加氏系が千葉宗家となり、居城を猪鼻城から本佐倉城[註1]に移したことから本城の歴史は始まる。本佐倉城に移った時期は文明16年（1484）といわれているが、確実な史料があるわけでもなく明確ではない。しかし、この頃臼井城が機能していたことは確かなことであるから、文明年間には千葉宗家は本佐倉城に移っていたのであろう。千葉宗家が居城を移した理由として、小笠原長和氏[13]は「北方に印旛沼・常陸川の水路がひらけ、古河御所をはじめ関東各地に通ずる四通発達の要地であり、常陸川沿岸から水郷方面にかけてのいわゆる下総台地の縁辺に幡居する海上・栗飯原・国分・大須賀・相馬などの千葉氏一族との連絡の便が良かったことが考えられる」と水運の重要性を指摘されている。また、猪鼻城近辺は原氏の勢力基盤であることからも居城を移さざるをえなかったと思われる。以後千葉氏は北総地域という限定された勢力基盤となった。そして、天正18年（1590）後北条氏と共に千葉氏も亡びるまで居城となっていた。

ところで本佐倉城は千葉氏の居城として100年間程使用されていたのだが、近世に書かれた軍記物も含めて攻撃を受けた記録が全くない城なのである。僅か西方７㎞のところにある臼井城は文明11年（1479）の太田資忠による落城や上杉謙信や正木氏によってたびたび攻撃を受けているにもかかわらずである。戦国期千葉氏の主要な敵対勢力が西方にあったことから、臼井城が常に防禦拠点になったのであろうか。

天正18年（1590）の千葉氏滅亡と共にこの城にも徳川氏の家臣が入城している。三浦義次、武田信吉、松平忠輝等が在城しているが、「鹿島山草分辨城主代々之事」[14]によれば本佐倉城の主要部を使用せず、主要部から南西に約１㎞離れたところにある大堀館を本拠としていたという。もしこの記述が史実とすれば、本佐倉城はこの時点で廃城も同然であろう。そして大堀館も元和２年（1616）佐倉城（中世鹿島城）の完成と共に廃され名実共に廃城となった。

城跡の概要　本佐倉城跡も臼井城跡と同様に狭義の城域と広義の城域に分けて捉えられる城跡である。広義の城域は後述するように近年の発掘調査によって実証されたものである。

まず狭義の城域についてみてみると、西から東に突出した舌状台地とその基部に広がるⅠ～Ⅴの郭から構成される（第３図）。各郭は空堀によって区切られ、主に西側に土塁が巡ることから、近世城郭の本丸に相当する郭は先端部のⅠ郭になる。Ⅰ郭は1980年千葉県教育委員会によって確認調査が実施された[15]。調査成果によれば、Ⅰ郭の広範囲にわたって盛土造成が認められている。ⅢとⅣ郭、ⅣとⅤ郭を区切る空堀は大規模なもので、臼井城や佐倉城の空堀に匹敵するもので、戦国時代でも末期以降にみられる規模である。Ⅴ郭は東西約200m、南北約300mの規模



第3図　本佐倉城跡概念図(主郭部・向根古屋遺跡は田中祥彦氏原図使用)

を有し主郭部の外郭に当たる。臼井城跡のIII郭と機能や形態的に非常に類似した郭である。南辺中央部の空堀とそれに伴う土塁は方形に張り出す「出桝形」という構造になっており、16世紀後半以降の形態といってよいであろう。以上Ⅰ～Ⅴ郭までが狭義の本佐倉城跡といえるであろう。その規模は東西約600m、南北約300mとなる。

次に広義の本佐倉城跡についてであるが、本城跡も臼井城跡同様支城群（砦跡）が近接して認められるので、まず現存遺構の認められる遺跡から述べていくこととする。

本佐倉向根古谷遺跡は本佐倉城跡主郭部の南側に支谷を挟んで対峙するような位置にある。南から北に突き出た舌状台地全域に占地し、東西約220m、南北約300mの規模である。遺構は南辺台地基部に顕著に認められる。特に折歪を持つ2条の空堀に挟まれた郭は「馬出」と同様なもので、戦国時代末期以降の形態である。本佐倉城の大手口は南側に想定出来ることから、本遺跡はおそらく主郭部南側から攻撃しようとする敵を牽制する機能を担っていたのであろう。

妙胤寺館跡は妙胤寺の裏側に土塁と空堀に囲まれた南北・東西共に約60mの正方形プランを呈する居館形式の郭である。また妙胤寺の西側に約50mにわたって土塁が一部空堀を伴っていることから、妙胤寺の地も郭とみることが出来よう。館跡は東と西から小規模な支谷が入り込み台地基部とまさに切り離されようとする地点に占地している。方形プランの郭は南側中央部のみが途切れ、ここが虎口となる。土塁は上幅3m、下幅6m、高さ1～2m、空堀は上幅5～7m程で折歪や出桝形といった防禦施設はなく直線である。形態や土塁・空堀の規模からみて防禦的には強固とはいえず、また新しい様相は感じられない。しかし、本佐倉城に隣接して防禦施設が未使用のまま存在していたとは考えられないので、兵站・出撃・監視の拠点といった機能を有していたのではないだろうか。妙胤寺東脇で1点ではあるが志野釉小皿片を表採しているので16世紀末～17世紀初めに機能（寺院としての機能も含めて）していた傍証となるであろう。

大堀館跡は千葉氏滅亡後に入封した徳川氏の家臣が本拠とした所といわれており、三浦義次や徳川家康の五男武田信吉などが入封している。通説としては、本佐倉城を廃城し大堀館に本拠を移したが、慶長8年（1603）に廃されたとされている。館跡は70m程突出した台地上に比定されているが、現存遺構は僅に約50mの土塁が斜面に沿って直線的に延びているのが認められるのみで、斜面部も自然地形のままである。土塁自体も一概に城郭遺構と断定出来る形態ではない。このように現存遺構からみる限りここを大堀館跡と比定するのは難しいが、比定地前面の畑で万暦様式の中国製染付、瀬戸・美濃製の灰釉小皿、鉄釉擂鉢、鉄絵志野釉等の陶磁器を表採していることや、後述する本佐倉北大堀遺跡の発掘結果からみて、この地が16世紀～17世紀前半に防禦施設を伴った生活空間として使用されていたことは確実なことから、大堀館跡の比定地としても間違いはないであろう。ただ、表採遺物でみる限り16世紀代にも使用されて

いたと思われる。

本佐倉北大堀遺跡は国道296号線バイパス工事に先立ち1983年から84年にかけて㈶千葉県文化財センターによって発掘調査が実施された。その成果によれば[16]（註2）、調査区東端で南北に走る上幅5m～6mの空堀が2条、南西端で東西に走る上幅8m～10mの空堀が1条検出されている他に、中世後半以降と思われる土坑墓や地下式坑が検出されている。また調査区は中世以降かなりの範囲で数十cm程削平を受けていた。本遺跡は16世紀代に利用されていたことは確実で、大堀館跡と密接な関係があると思われ、さらに本佐倉城跡との関係でも捉えられるであろう。

上本佐倉上宿遺跡もやはり国道296号線に関係した発掘調査が1984、85年に実施された[17]。検出遺構は土橋を伴う上幅5.5mの空堀1条、竪穴状遺構17基、掘立柱建物址13棟以上、井戸跡6基、地下式坑6基等がある。出土遺物は中国製染付・白磁、瀬戸・美濃天目釉・灰釉、常滑等の陶磁器があり、遺物からみると16世紀後半が主体と思われる。土橋を伴う空堀は支谷内の西縁に沿って走っているが、ここは北方の印旛沼から延びる支谷と南方の高崎川水系から延びる支谷が最も近接するところで、台地上は僅かに20m程の幅しかない。空堀は当然南北に延びるものであるが、地形的な要因からこの空堀は本佐倉城の大手口防禦のためのものであろう。ところで本遺跡のもう一つの特徴は掘立柱建物址、井戸址、竪穴状遺構（底面が踏み固められてないことから半地下式の倉庫のような施設と捉えている）といった生活遺構が多数検出されていることである。未整理のため詳細に言及出来ないが、城下町的な集落か役所的な施設が考えられるであろう。大部分の遺構は先述した出土遺物の様相から16世紀後半と思われるが、1基の竪穴状遺構から寛永通宝が出土しているので、17世紀代にも本遺跡は引き続いて使用されていたと思われる。

上本佐倉外宿遺跡は上宿遺跡と同時に発掘され、遺構は近世後半の時期のものが主体を占めているが、美濃大窯期の灰釉小皿が少量ではあるが出土していることから、本遺跡も上宿遺跡と同時期に使用されていたのであろう。

以上Ⅰ～Ⅴ郭の主郭部と本佐倉向根古谷遺跡、妙胤寺館跡、大堀館跡、本佐倉北大堀遺跡、上本佐倉上宿遺跡を含めた範囲を広義の本佐倉城の城域として捉えている。その規模は東西約1,100m、南北約1,350mとなる。さらに上本佐倉外宿遺跡出土の中世遺物や北押出し遺跡で検出された中世館跡[18]、及び主郭部と支谷を狭んで東側の台地に腰曲輪の認められる右京館跡とⅤ郭の西側も含めれば東西南北共により大規模になる。

さて本佐倉城が広範囲な城域を形成したのは、Ⅳ郭とⅤ郭の間の大規模な空堀、Ⅴ郭の外郭線の「出桝形」、向根古屋遺跡の「馬出」的郭、上宿遺跡の遺構・遺物に顕著に現われている16世紀後半の時期としてよいであろう。臼井城や当時の政治情況をも考慮すれば、16世紀第4四半期に入っているのではないだろうか。

ところで、本佐倉城跡では臼井城跡と違って上宿遺跡でみられるような生活遺跡が確認されているが、広義の城域が内包する様々な機能を解明する上で重要な資料となることは間違いない。しかし今回は未整理の段階のためそこまで言及することは差し控えざるをえなかった。

2章2節 註

註1 本来ならば「佐倉城」と記さなければならないが，近世に入り新たに別の場所に城を築き，そちらを「佐倉城」と呼んだため，中世佐倉城は本(もと)佐倉城と云うようになった。そして現在はこの名称で固定しているため，本論もそれに倣うこととした。

註2 国道296号線関連の発掘調査はまだ未整理ではあるが，今回本論を書くにあたって調査時の資料を活用させてもらった。

(3) 生実城跡

位 置 千葉市の南部生実町に所在し、国鉄蘇我駅から東南に約2kmの所に位置する。城跡は千葉市土気地区に源を発し東京湾に沿ぐ村田川下流域の沖積平野に直接面する台地に占地している。この沖積地の村田川下流域右岸は往時曽我野と呼ばれていた。また村田川は現在右岸の一部が市原市域となっているが、元来はこの河川が下総と上総の国境いであったであろう。

城跡の占地する台地は、北と南に沖積地に開く支谷が入り込み舌状台地となっている。台地上の標高は20m前後、水田面との比高14m前後を測る。

歴 史 村田川下流域の右岸は15世紀初頭頃から原氏の勢力基盤の一つであったらしい。15世紀中頃には小西城（山武郡大網白里町）の原氏が『本土寺過去帳』にたびたび記載されていることから、現在の千葉市南部から東部にかけてが勢力範囲であったと思われる。またこの頃には千葉氏の重臣の位置を占めていたと思われる。ただこの時点での居城は、生実城と同音で南南東に1km程の所にある小弓城を居城としていた。16世紀に入ると原氏は真里谷城（木更津市）を居城とする武田氏と抗争していたが、武田氏や里見氏など上総・安房の領主層の盟主となる足利義明が登場することによって小弓城を奪われることとなった。以後足利義明は小弓公方と称した。しかし天文7年（1538）の第1次国府台合戦によって小弓公方側が敗れると、原氏は小弓城に復帰し、翌年生実城を築城しそちらに本拠を移したという。16世紀中頃に原氏が臼井城に進出しそちらを本城とした後も、原氏にとって最も重要な支城であり、また千葉氏や後北条氏にとっても、安房・上総の里見氏に対する最前線の城であった。永禄4年（1561）と元亀二年（1571）には里見氏によって落城させられたが、その都度奪い返したとされる。この頃の緊迫した状況を伝える史料で千葉胤富から井田氏に宛てたものに[12]、里見氏が窪田城（君津郡袖ヶ浦町）を築城まもなく、生実の近辺でも築城を計画しているので、早急に攻略しなければならないと述べられている。天正18年（1590）後北条氏と共に原氏も滅亡し、生実城にも徳

第４図　生実城跡復元概念図（一部『日本城郭大系６』原図使用）

川氏の家臣が入城することとなった。まず西郷家員が元和6年（1620）まで在城し、その後森川氏が生実藩一万石の領主として入封し、生実城内の一画に陣屋を構え廃藩置県まで続いた。

城跡の概要　生実城跡は主郭部が1969～70年の宅地造成により全域にわたって破壊され、現在は全く遺構を認めることが出来ない状況である。僅に生実藩陣屋跡を囲む一部の空堀と大手口の空堀が残されているのみである。しかし、1972年に撮影された航空写真[註1]や絵図[19]から主郭部はかなり復元が可能であったので、復元概念図を基に説明していきたい（第4図）。

城跡は東から西に突き出した舌状台地の先端部に占地しているが、この台地は先端へ行くに従い幅広となり、先端部は南北約650mとなる。このため主郭部は台地の北西端に築かれている。主郭部は大きく4ヶ所の郭からなり、それぞれ折歪を持つ空堀によって区画される。規模は東西約200m、南北約150mを有する。北西端の郭が本丸に相当し、東・北・西の斜面下には空堀を伴う帯曲輪が巡らされている。現在生実藩陣屋跡の東側に上幅7m～8mの空堀が残っているが、主郭部を画する空堀に続き、北西角を隅落しにしている他は100m四方程度に空堀で囲まれた館形式の一郭であった。主郭部との関係から生実藩時代にはあまり手を加えていないと思われる。大手口と考えられる地点は、北から支谷が入り台地が最も括れる所で、支谷を最大限に利用しながら空堀によって台地基部から切り離している。内側に土塁が部分的に残っている。また空堀はコの字状に屈曲し「出桝形」を形成している。字町並と呼ばれる集落は台地南半分に展開している。無論生実藩の城下町として発展した名残りであるが、主郭部と空堀によって区画されたり、大手口の空堀の入り方をみるとここも生実城の城域に含められることは確かであろう。規模は東西約550m、南北約650mとなる。

生実城跡は支谷を挟んで北と南の台地上に支城があったと伝えられている[20]。本郭から北西に約300mの地点に柏崎砦があったというが、現在学校施設が建っており遺構は全く認められず確認することは出来ない。しかし、伝承通りに存在していたとすれば、生実城主郭部と同様な標高で北から北西方向の視界を遮ることから、この方面の監視が任務であったと考えられる。また直接本郭を攻撃する敵を牽制することも重要な任務となろう。生実城南辺から南に約150mの地点には長山砦があったという。ここも現在遺構を全く認めることは出来ないが、以前は土塁で囲まれた一画があったといわれる[21]。実在していれば、柏崎砦同様視界を遮ることから、南方の監視を主要な任務としていたと思われる。

さて、生実城跡とその支城と伝えられている砦跡について概観してみたが、生実城跡は大きく北西部の主郭部と北東部から南半部の外郭部とに2分されるであろう。先述した臼井食跡、本佐倉城跡と比較してみると、主郭部については、規模的には同程度であるが、構造は生実城跡の方がより複雑であった印象を受ける。外郭部は臼井城跡のIII郭、本佐倉城跡のV郭に相当する郭であるが、さらに両城の広義の城域にも当たるものであろう。外郭内には砦跡は認めら

れていないが、近接した地点に柏崎砦跡と長山砦跡の２ヶ所の支城があったと思われる。生実城跡や２ヶ所の砦跡は無論のこと、外郭内でもいままでに発掘調査が実施されていないこともあって、具体的な状況を把握することは現状では困難である。ただ、外郭北東部の支谷内と東側の台地で、1981年から82年にかけて県営住宅建設に伴う発掘調査が㈶千葉県文化財センターにより実施されたが[22]、生実城跡に伴うかあるいは同時期の遺構・遺物は全く検出されなかったことから、大手口から東側は城域外の可能性が強い。また２ヶ所の支城は、広義の城域を主郭部を中心とした「総構」構造とするならば、それには含まないことになる。

生実城跡は、臼井・本佐倉両城のごとく広義の城域の概念はないものの、外郭がそれに相当する機能を有していたのではないかと思われる

２章３節　註

註１　２枚の航空写真を立体視したところ，主郭部の空堀や腰曲輪を明瞭に判読することが出来た。なお，使用した航空写真は京葉測量㈱が撮影したもので，1972年以降の県内全域の航空写真を市販している。

３．各城跡の検討

２章で３ケ所の城跡について概要を述べてきたが、これらの城跡には多くの共通性を見い出すことが可能であろう。

まず、各城跡とも主郭部と外郭に大きく２分される縄張をもつため、必然的に広範囲な城域を有することとなる。そして広い城域を台地上に展開するために幅広の台地を利用し、支谷を堀に取り入れたり、斜面を削り落したりして壁面を造り出すなど自然地形を最大限利用している。ただ、これらの共通点ならば同様な地形がみられる下総から上総北部にかけて、土気城跡[23]（千葉市）や佐是城跡[24]（市原市）など主郭部と外郭からなる大規模な城跡は何例か見い出すことが出来る。

しかし、主郭部と隣接して支城群が認められることは、土気城跡や佐是城跡などの大規模な城跡には認められない点であろう。臼井城跡には洲崎砦跡・仲台砦跡・田久里砦跡・稲荷台砦跡・臼井田宿内砦跡の五ケ所、本佐倉城跡には向根古屋遺跡・妙胤寺館跡・大堀館跡の三ケ所、生実城跡にはやや不確実ではあるが柏崎砦跡・長山砦跡の二ケ所がそれぞれ存在していた。

またそれらの支城や発掘調査によって検出された空堀や同時代の遺構も含めてみると、臼井城跡と本佐倉城跡には主郭部と外郭からなる狭義の城域と支配群を取り入れた広義の城域を持つことが明らかになった。生実城跡は２ケ所の支城が支谷を挟んで対峙していることから、広義の城域は存在していなかったと思われる。この点については広義の城域が造られた戦国時代末期に臼井城を本城とする原氏にとって生実城は支城の機能を有していたための質的な差によ

るものと思われる。隣接して支城が集中することは、臼井・本佐倉・生実の各城跡に、狭義の城域と広義の城域を有することは臼井・本佐倉両城跡に認められるが、このことは各城の機能を考える場合に重要な鍵となるであろう。

主郭部に隣接して支城が存在することは、当然ながら本城を守ることが主目的であるが、支城の城主を考えた場合、本城の城主である原氏・千葉氏と密接な関係を捉えることが出来る。ここでの支城は、在地領主の居城が支城網に組み入れられたものではなく、純粋に軍事的な観点から築城されていることから、支城主は在地支配からは離れているといえる。このことは原氏・千葉氏の直臣に在地支配から完全に、あるいはかなりの程度で脱却した一団が存在していたためではないだろうか。またそのような直臣層が存在していたからこそ、本城に隣接して支城を築くことが可能ではなかったのではないだろうか。臼井城跡の項で取り上げた「臼井郷図」に洲崎砦跡と仲台砦跡を家ノ子部屋城と記載していることからも窺うことが出来る。

狭義の城域と広義の城域の関係については、臼井城跡は東西1100m・南北1650m程、本佐倉城跡は東西1100m、南北1350m程の大規模な城域を有するが、軍事的にみればあまりにも広範囲過ぎ、せいぜい主郭部と外郭からなる狭義の城域が守るのに適した範囲といえよう。しかし、広義の城域内に認められる支城群や防禦遺構はあくまでも敵の攻撃に備えるものであり、臼井・本佐倉両域とも総構の構造になっていたのは確かである。では防禦的には強固ではないが、原氏や千葉氏が守ろうとした広義の城域内でどのような機能を有していたか考えると、支城主の点で存在が捉えられる家臣団層の集住と、経済的な面から支える城下町的な機能の場としての空間ではないであろうか。現状では家臣団の屋敷やどの程度の城下町が存在していたかは全く実証出来ないが、本佐倉城跡内の上本佐倉上宿遺跡の生活遺構群や中世基域の検出から推測は可能であろう。近世佐倉城の城下町は舌状台地の先端部を城域とし、台地基部にかけて城下町が台地上に展開しているが、この構造の初源は臼井・本佐倉両域にあったのではないだろうか。

ところで、臼井城を本城とする原氏は本佐倉城を本城とする千葉氏の家臣であったが、天正18年（1590）両氏が滅亡する直前には、下総で下克上を果し実質的な盟主であった。この点については、天正18年頃書かれた『毛利文書』「北条氏人数覚書」「関東八州諸城覚書」の動員兵力数をみれば一目瞭然であろう。前書には原氏二千騎・千葉氏三千騎、後書には原氏二千五百騎・千葉氏三千騎とあり、千葉氏の方が動員兵力数は多いが、これは北総を中心とした千葉氏一族の連合体であることから、実質的には原氏の方が多いといえよう。また小笠原長和氏[13]が既に述べられているように、天正13年（1585）千葉邦胤が家臣に殺され幼少の重胤が千葉宗家を継いだ後は完全に千葉氏は名目上の存在であり、千葉氏三千騎も原氏の統制下にあったものと思われる。

以上のように戦国時代末期において、原氏の実質的盟主化が正しいならば、本佐倉城も原氏

の勢力下に置かれていたと思われる。僅に直線距離で約7kmしか離れていない大規模な城郭である両城ではあるが、非常に共通した構造と原氏の勢力を考えると、原氏の築城思想が両城に取り入れられているといっていいのではないだろうか。ところで、近世佐倉城の本丸跡の発掘調査で、出桝形や折歪を持つ中世の空堀が検出され、鹿島城跡の存在が実証されている。[25] 鹿島城は天正年間に千葉氏が本佐倉城から本城を移すために築城を始めたが中断したまま滅亡し、後に近世佐倉城の基礎となった城といわれている。「鹿島山草分拜城主代之事」[14]では後北条氏の命により鹿島城築城が始まったとされているが、本来は原氏の本佐倉城入城に伴う動向ではなかっただろうか。

原氏は戦国時代末期には小金城（松戸市）を本城とし東葛地域を領有する高城氏の領域を除いた下総中央部から東部を実質的に領有し、臼井城と本佐倉城にみられる総構構造の城郭と在地支配から離脱しつつあった家臣団層の存在から考えて、後北条氏の統制下にあったものの、かなりの程度で戦国大名化を成し遂げつつあったのではないかと思われる。

4．おわりに

臼井城跡・本佐倉城跡・生実城跡の三ケ所の中世城跡を取り上げ、戦国時代末期における原氏の権力構造の一端を検討してきたが、本論で述べようとしたことを簡単にまとめてみたい。

① 主郭部に隣接して支城群が集中して認められることは、在地支配から完全にまたは不完全ながらも切り離された家臣団層が原氏には存在していた可能性がある。

② 臼井城と本佐倉城は狭義の城域と広義の城域とに捉えられ、広義の城域は家臣団層の集往や城下町的な機能を内包していたと考えられる。

③ 臼井城と本佐倉城の類似性から、戦国時代末期には、原氏は千葉氏の居城である本佐倉城も手中に収め下総の大半を領有していたと考えられる。

④ 戦国時代末期に、原氏は後北条氏の統制下のもとで戦国大名化を成し遂げつつあったと思われる。

以上中世城跡の縄張と考古学資料を中心に論稿してきたが、資料的に偏重したことと、他地域との比較検討を行なっていない点などから、論稿に推測が多いことは認めざるをえない。やはり関連する中世文書の検討や、関東各地の戦国大名の権力構造、戦国期城下町といった点での比較検討が必要不可欠であろう。ただ、近年の中世城跡研究の進展の割には中世史研究に寄与しているとは言いがたい現状において、本稿が用いた中世城跡を基礎資料とする方法論が、少しでも中世城郭が中世資料化するための助けになればと思い敢て論稿した次第である。

最後に本稿を書くにあたって、岡田茂弘、高橋三千男両先生には多くの御教示を頂いたこと

を記し、感謝の意を表させていただく。

引用文献

(1) 木全敬蔵 1985 「城館址発掘調査・分布調査報告書一覧」『埋蔵文化財ニュース51』奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

(2) 千葉県教育庁文化課 1984 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報―昭和57年度―』

(3) 千葉県教育庁文化課 1985 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報―昭和58年度―』

(4) 松岡 進 1985 「関東における戦国期城下町の構造と権力」『民衆史研究第29号』

(5) 市村高男 1982 「関東の城下町」『講座日本の封建都市第3巻』

(6) 市村高男 1982 「関東における戦国城下町の展開」『戦国史研究第4号』東国戦国史研究会

(7) 塙保己一編 『群書類従』巻382

(8) 千葉県企画部 1982 『千葉県史料（中世・本土寺過去帳）』

(9) 〃 1966 『千葉県史料（中世篇県外文書549号）』

(10) 臼井城跡研究会 1985 『臼井城跡・Ⅰ郭跡第2次発掘調査概要』

(11) 柴田龍司 1984 「臼井城跡発掘調査報告」『千葉県中近世城跡研究調査報告書第4集』千葉県教育委員会・㈶千葉県文化財センター

(12) 旭市史編さん委員会 1975 「戦国期千葉氏関係文書」『旭市史第三巻』旭市

(13) 小笠原長和 1970 「戦国末期における下総千葉氏」『軍事史学』第5巻第4号

(14) 佐倉市史編さん委員会 1971 「鹿島山草分拜城主代之事」『佐倉市史巻一」佐倉市

(15) 小室栄一 1981 「本佐倉城跡発掘調査報告」『千葉県中近世城跡研究調査報告書第1集』千葉県教育委員会

(16) ㈶千葉県文化財センター 1984 『千葉県文化財センター年報No.9』

(17) ㈶千葉県文化財センター 1985 『千葉県文化財センター年報No.10』

(18) 藤原 均他 1984 『北押出し遺跡』酒々井町教育委員会

(19) 千葉市市長公室広報課 1982 『市民フォト千葉No.37（特集生実藩）』

(20) 千葉県 1919 『千葉縣誌』

(21) 宍倉健吉 1981 『郷土の歩み』生浜郷土史研究会

(22) 白石浩他 1983 『千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書』㈶千葉県文化財センター

(23) 山本 勇 1980 「土気城」『日本城郭大系6』

(24) 柴田龍司 1986 「佐是城跡発掘調査報告」『千葉県中近世城跡研究調査報告書第6集』千葉県教育委員会・㈶千葉県文化財センター

(25) 田村言行・高橋建一他 1982 『総州佐倉城』佐倉市

（千葉県文化財センター調査部）